

# 「型」の崩壊と生成（梗概）

## —— 体験記述にもとづく日本住居現代史と住居論 ——

ハウジング・スタディ・グループ  
代表 鈴木成文

### 1. 研究の目的

昭和初期から今日までの日本住居の「型」の崩壊とその変容、新たな型の生成の過程を、とくにその生活内容との関わりで明確に記録・記述し、これをもとに現代住居の平面構成における「型」の意味、住様式との対応について論ずることを目的とする。

日本の住居は、近世までは民家及び武士住宅に明瞭な型があり、近代以降も形を変えながら存続した。その急速な崩壊が起こったのは、戦後期及びとくに高度成長期である。都市化に伴う急激な人口移動、家族形態の変化、職業形態の変化などの社会的要因が大きいと思われるが、同時に居住者の意識・価値観の変貌もまた大きな要因である。しかし一方、多様になったかに見える現代の住宅も、実際には画一的な構成がひろく普及していることが近年の研究で指摘されている。ただし、新たな住宅の型が定着したといえる状況にはまだ至っていない。

かつての日本住宅の「型」の形態の特徴や成立過程については近代住居史において既にかなり明らかにされている。しかし、ここではむしろ、それらの型のもつ生活上の意味がどのようなものであったか、また居住者はこれをどのように意識していたか、さらに戦後の展開においてそれらがどのように変わってきたのかを明らかにしたい。つまり、近代以降とくに戦後の住宅の歴史を、「居住者の眼」で捉え直したいのである。

その方法としてこの研究では、研究者自身或いはそのごく身近な者の住居について、研究者自身がとくにその生活との関わりで記録・記述することを試みた。そして、これらの多くの生活体験記述をもとに「型」の意味とその変容を考察し、それを踏まえて、現代の住居の動向、とくに型の崩壊の意味するものと、新たな型の生成の動きについて考察する。

同時に、対象を的確に位置づけ、記述表現の質を高めることにより、記述自体が日本住居現代史として貴重な資料になりうると考える。そのような意味で、居住体験にもとづく住居現代史の記録方法の模索も付随的な一つの目的である。

なお、ここでいう住居の「型」は、主にその形態的特徴にもとづいてはいるが、それが単に形態のみを指すものとして捉えているわけではない。住居において生活と

空間は相補的であり、生活の変化が新たな住居の「型」を生み出す場合もあるし、新たな形態が普及することによって生活の変化がおこる場合もある。住居が一定の「型」を成立させる背景には、生活もまたひとつの型を成しているということがある。ここではそのような住居形態と生活の相互作用の結果として普及・定着した住居の形式形式を「型」と呼ぶ。したがって、この研究における住宅の「型」とは、いずれもそれぞれに対応した「生活の型」が想定されうるものである。

また、たとえば「田の字型」「中廊下型」など住宅全体を指すもののほかに、「続き間」「DK」など住宅の部分に関する型も取り上げたい。この研究の注目する戦後の展開においては、このような部分の「型」が重要な役割を担ってきたように思われるからである。

### 2. 研究の方法

「型」の変容過程を、その生活上の意味や居住者の意識を踏まえて明らかにするために、本研究では研究者自身の居住体験を本人が記述する方法を用いた。

まず、記述の対象とする住居を、ほぼ正しい平面図が描けることを条件として選んだ。記述の内容は、平面図に加えて建設年／建設あるいは入居の経緯／居住期間／家族構成／住み方／地域生活／及びそれらの変遷であり、思い出す生活場面をまじえながら、その住居と住生活の特徴をよく示す内容に重点を置いて記述を進めた。この記述では自らがそこに居住した期間の直接的な体験に関するものが中心ながら、必要に応じて、その前後の家族の体験談も含む、広義の体験を取り上げた。

分析はもっぱら個々の記述についての解釈・討論によった。住居と生活の関わり方の様々な面に直接肉薄することを意図したためである。それをもとに焦点を定めて記述を加え、さらに討論と解釈を重ねた。

また、居住者の体験によって描かれる住居現代史は、記憶であり、思い出であり、そこに居住者の主観が含まれるところに特色と意味がある。このような記述が持つ特性、即ち、人生における居住時期や居住期間、家族における立場の違いなどが記述内容にどのような影響を及ぼすのか、また主観は事実に対してどのように働くのかなども考慮しつつ分析を進めた。

### 3. 対象事例の概要

現在の住宅の分類については、大きく農林漁業併用住宅、専用住宅、店舗併用住宅の三つがあるが、ここでの対象事例には農林漁業併用住宅（及び漁村住宅、農村住宅）の例はない。そして、体験記述は比較的新しい戦後の生活が主である。その上で現在得られた間取り44例を平面型式の特徴によって分類すると以下のような12のタイプに分けられる。

- I. 町屋系一店舗付き：6例
- II. 続き間型：1例
- III. 中廊下型：3例
- IV. 在来型の成長変化：3例
- V. 戦後期小住宅：1例
- VI. 間借り・寮：2例
- VII. 零細アパート：6例
- VIII. 公共アパート：5例
- IX. モダンリビング：1例
- X. 工務店の建売：3例
- XI. 現代型独立住宅：7例
- XII. 現代マンション：7例

I. 町屋系は町屋のように接道する形式をとるものである。ここでの主な内容は、続き間の生活と「みせ」を介しての道とのつながり、及び改築を重ねてその時代に適応していく過程などである。また、III. 中廊下型、IV. 在来型の成長変化の例としてそれぞれ〈中川〉、〈増山〉がある。いずれも一つの家に住み続けた体験を報告している。〈中川〉では家族の器としての住宅を特に改築することなく住みこなしていく過程を、〈増山〉では頻繁な増

改築により生活の要求に対応していく様子を記述している。

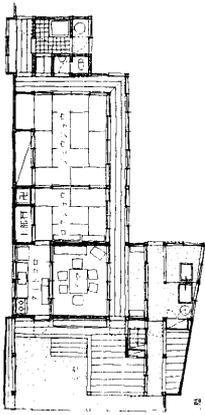
戦後の新しい間取りの概念を投影した平面型であるV. 戦後期小住宅、IX. モダンリビングの例として〈近沢〉、〈小平〉がある。これらは理念によく適合した住まい方を記述している。また、公営・公団・公社住宅、公庫住宅などの供給住宅を中心に普及した「ダイニングキッチン」を持つ平面型の体験例は5例ある。そして、いずれも若夫婦+幼児というライフステージの生活を報告している。また、高度成長期に郊外住宅地に建った一戸建て住宅としては、〈佐藤〉、〈酒井〉を含む11例がある。これらの多くは庭をもち、1階に居間や和室、2階に子ども部屋のある、主として核家族に対応した平面型である（X. 工務店の建売、XI. 現代型独立住宅）。このなかで〈佐藤〉は建売住宅取得の経緯やそこの近隣生活を、〈酒井〉は供給側の意図とは異なる実際の住まい方を報告している。一方、大都市の表通りに面して建つXII. 現代マンションは、比較的規模の大きい、むしろ戸建て住宅と似た間取りをもつ供給住宅である。この例として特に〈江副〉はあるライフステージの家族生活とこうした分譲マンションの間取りとが過不足なく対応していることを記述している。また、大都市中心部の裏通りに面した借家（VII. 零細アパート）の他、供給住宅の例として学生寮や間貸しの例が得られている。

4章では、このうち都市の専用住宅を7例選り紹介した。この7例は現在も進行中の体験記述という作業の広がり示すのにふさわしい典型と判断されたものである。従って、必ずしも現代日本住宅を体系的に語るための典型例とはなっていない。

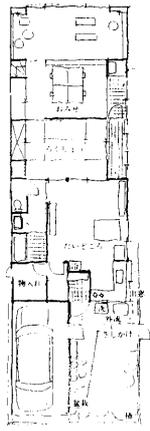
表1 4章で紹介する対象事例の一覧

番号	氏名	建設年代	記述年代	本人の立場	ライフステージ	タイトル
4-1	中川 澄子	昭8	昭23-59	長女(孫)	幼年・成長期	住み続けられた中廊下型住宅
						住宅の増改築は少なく、むしろ住まい方の変化していく様子を記述している (中廊下型)
4-2	増山 登	昭13	昭18-55	次男	幼年・成長期	変わり続けた住居
						頻繁な増築により、その都度生活の要求に対応していく様子を記述 (在来型の成長変化)
4-3	小平 遊	昭25	昭27-33	長男	幼年・少年期	戦後の小住宅
						開放的な小住宅における家族及び近隣の生活を記述 (戦後期小住宅)
4-4	近沢 進一	昭41	昭46	婿	結婚後両親と同居	モダンリビングへの戸惑い
						モダンリビングに住んだときの印象と生活様式を記述 (モダンリビング)
4-5	酒井 一郎	昭37	昭37-39	長男	少年期	変動期の郊外建売住宅
						おしきせの平面通りには展開しない生活を記述 (工務店の建売)
4-6	佐藤 和子	昭57	昭58-63	母	子供の受験期	郊外のマイホーム
						住宅取得の経緯とそこの家族・近隣生活を記述 (現代型独立住宅)
4-7	江副 満生	昭56	昭56-62	父	小学生の子育て期	典型的な3寝室型平面のマンション
						あるライフステージと過不足なく対応したマンションの間取りについて記述 (現代マンション)

I. 町屋系一店舗付き

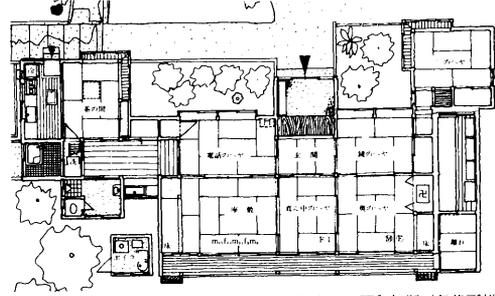


岩手県江刺市 昭和10年



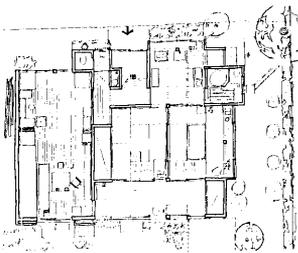
神奈川県横浜須賀野市 昭和27年

II. 続き間型

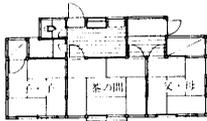


石川県能美郡 昭和初期(年代不詳)

IV. 在来型の成長変化



V. 戦後期小住宅

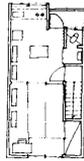


東京都千代田区 昭和20年代

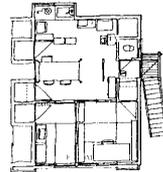
VI. 間借り・寮 VII. 零細アパート



東京都豊島区 昭和30年代

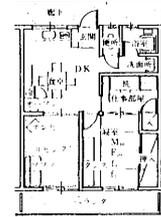


大阪府吹田市 昭和30年代

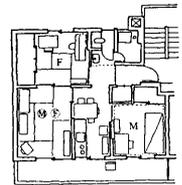


東京都世田谷区 昭和20年代

VIII. 公共アパート

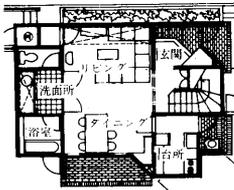


東京都小平市 昭和54年



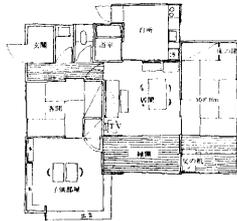
東京都千代田区 昭和35年

IX. モダンリビング



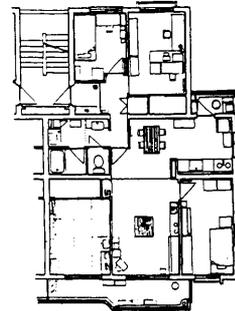
神奈川県藤沢市 昭和50年

X. 工務店の建売



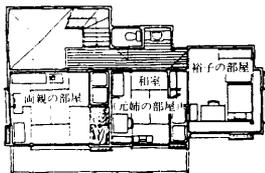
東京都三鷹市 昭和35年頃

XII. 現代マンション

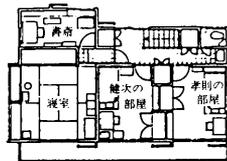


千葉県習志野市 昭和56年

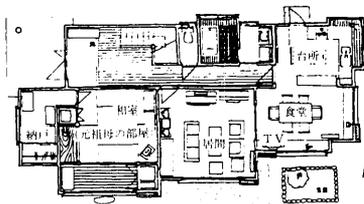
XI. 現代型独立住宅



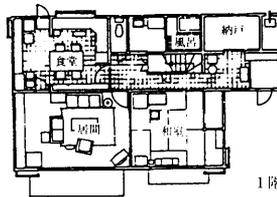
2階



2階



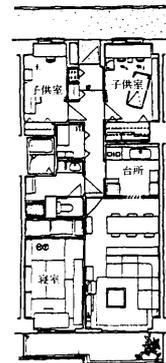
1階



1階

千葉県松戸市 昭和57年

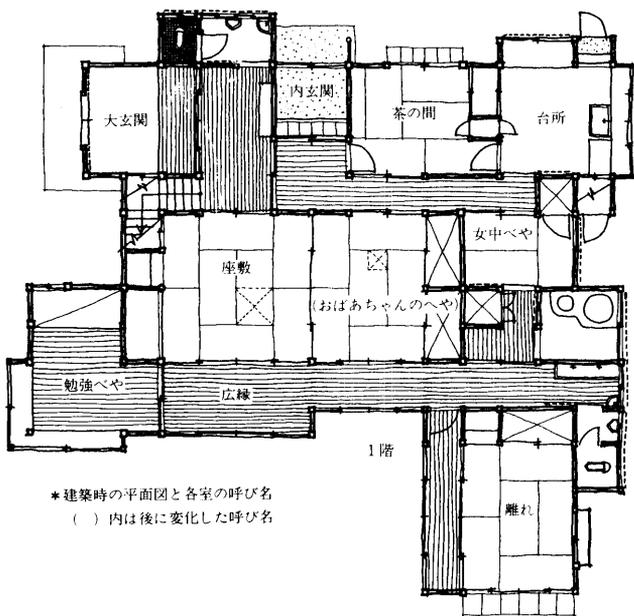
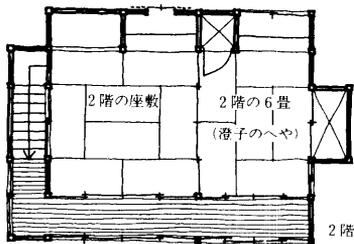
川崎市麻生区 昭和53年



東京都世田谷区 昭和44年

#### 4.1 住み続けられた中廊下型住宅（中川澄子）

- ・昭和8年建築 ・昭和44年一部、59年全体取り壊し
- ・東京府荏原郡（現東京都世田谷区）・木造2階建持家
- ・敷地面積 125.7坪 ・延床面積54坪



\*建築時の平面図と各室の呼び名  
( )内は後に変化した呼び名

この中廊下型住宅は必ずしもその典型ではなく、建築時に既に型への変形が加えられている。その後のおよそ40年間、ほとんど増改築されることなく住み続けられたが、その経緯から、型が住み方によってさらに崩壊していった過程を読みとることも、また、そのような変化を許容した型の力を読みとることもできる。

##### 〈対象住居の概要と位置づけ〉

建築時の家族構成は、建築主であった祖父（52歳）と祖母（41歳）の夫婦、その長男である父（19歳）以下7歳までの男子5人の7人家族と女中であった。

プランは、(1)茶の間が北側、(2)座敷が玄関から直接入れる位置にあり、次の間はこたつのある居間、(3)あらたまった接客用の2階座敷に違い棚、1階座敷にはこたつと仏壇、(4)洋風応接間がない（これは祖父の意向という）(5)出入口は大玄関、内玄関、勝手口の3つ、トイレは2つ、などの特徴を持つ中廊下型住宅である。

設計には棟梁とその息子（建築の専門学校出身）と祖母の意向が主に反映されたという。また、祖父の死亡後、祖母の考えによって、次男夫婦以下は一時同居し、その後次々に独立するという形で住生活が展開した。

##### 〈寝室の移りかわり〉

40年間は、大きく、父の結婚までの核家族期、叔父たちが結婚して独立していく複合家族の変動期、及びその後の直系家族期の3期に分けて捉えられるが、一貫して、夫婦寝室としては第一に“離れ”が選ばれ、第二に“2階の6畳”，第三に“勉強部屋”が選ばれている。このような独立性の高い部屋が複数存在したことが、戦後において生計とともに食事室とトイレを分けて生活した複合家族の居住を支えたものと思われる。

昭和23年に生まれた私の記憶は、父母、妹とともに寝室を“2階の6畳”から“離れ”に移した頃から鮮明になる。その後2歳下の妹と“お座敷”で寝るようになり、一番下の叔父の一家が“勉強部屋”を出て独立した後、その作り付けのベッド（叔父が結婚した時に幅広く改造してあった）に二人で寝たのは東の間で、ピアノを置くためにベッドは壊して、再び“お座敷”で寝るようになったのだった。二人の机を置いた“勉強部屋”は、文字どおりの“勉強部屋”となった。

その後ピアノを専門にしはじめた妹が“勉強部屋”を独占し、そこにベッドを置いて寝るようになった。私はそれを羨ましく思ったものだ。北側の小さな窓が好きだったこともあるが、家の中の唯一の洋風イース式の部屋への憧れがあったことも確かである。私は“2階の6畳”を自分のへやにした。乳幼児の頃の寝室に戻ったことになる。東側の高めの小窓が気に入り、その下に机を置いた。義理の叔母たちは“恐いのにえらい”などと感心してくれたが、その頃2階はめったに雨戸を開けない、ちょっとして異界になっていたのである。

##### 〈二つの座敷〉

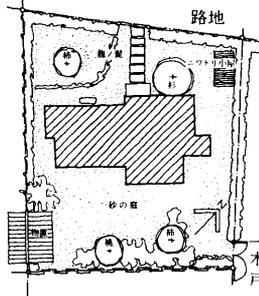
中廊下型住宅において一般的とされる住み方とは異なり、“お座敷”は居間として、こたつでの団らんや勉強などに活用された。この性格は時代を下るにつれて強まったと見られるが、それを可能にしたのは、あらたまった接客室としての2階の座敷の存在、逆に完全な家族の部屋としての茶の間の存在に加えて、掘りこたつ、仏壇、広縁その他の建築条件であった。これらは最初の設計案から変更された点であり、居住者、特に祖母が居間の座敷を意図していたと見ることができる。

また、茶の間、座敷、広縁の拵りが、この住居の中央部分に家族の領域を形成しているが、次の間にあたる祖母の部屋もその一部を成していた感がある。いつも開放されていたし、茶の間から庭に抜ける風は心地よく、子供の昼寝の場でもあった。一方“お座敷”は毎日掃除し、仏壇の水を換え、お経をあげ、こたつに炭を入れる祖母の領域として意識できた。この続き間はやはり一つながりの空間として思いおこされる。取り壊す数年前、祖母のお葬式をしたのもこの続き間である。欄間の長押が祭壇の写真を少し見にくくしていた。

## 4.2 変わり続けた住居 (増山 登)

- ・昭和13年頃建設。その後、都合7回の増改築。
- ・神奈川県藤沢市鶴沼 ・木造平屋建借家
- ・敷地面積 75坪 ・延べ床面積 13坪 (現53坪)

鶴沼の家は、別荘として建設されたものではなく、寧ろ東京に通うサラリーマン向けに建設された独立住宅の一つである。農家が畑を宅地化し、その上に借家を建てたものを、借地のまま買い取ったものである。建物は敷地のほぼ中央に配置され、南側の庭と北側の庭の大きさはほぼ同程度であった。隣家と共用の物置のある南側の庭には、柿・桃・やつで等が植えられ、庭の中央は砂地のままであった。砂はサラサラで、手で振り払えば楽に落とせた。しかし、この南側の庭で遊んだ記憶はなく、寧ろ道路側の庭で遊んだように記憶する。この道路側の庭は木戸から玄関にまっすぐに伸びた石畳で二分され、一方には後に野良犬に荒され取り壊された鶏小屋があり、他方は龍の髭で縁どられたただっ広い砂地の庭であった。我が家が面する路地には10軒の家が並ぶ。現在でもその間取りを思い出せる7軒の中の3軒が路地の北側に位置し、生け垣を通し座敷を伺えた。路地の南側に位置する残り4軒の内の2軒が、北向きになるにも拘らず、座敷を路地側に向けていた。この2軒の内の1つが我が家である。

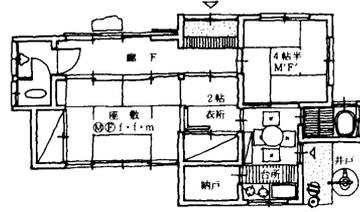


入居当時の配置

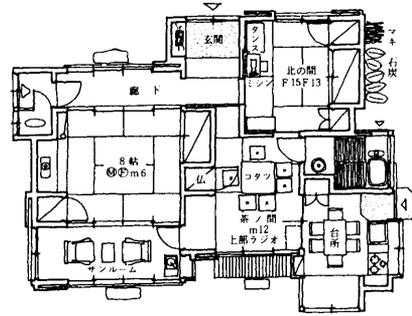
建設当時の間取りは、和室二間、一部が簀子敷きであった台所、父が「玄関の間」と呼ぶ2畳の間に、浴室・便所・納戸が備わった小さな家であった。その後、①吹きさらしの流し廻りの改造及び座敷南側の廊下設置 ②板間での食事・台所の雨漏り等の解消のため、茶の間及び台所を充実 ③父が力を入れてつくったサンルームの設置及び座敷の拡充 ④玄関及びそれまで老夫婦が使用していた北の間の拡充更に周辺の下水道整備に合わせ台所のDK化 ⑤長男の勉強部屋として計画された離れの増築 ⑥夫婦だけの生活に入り、かねてからの主婦の密かな願いであった茶の間の洋風化及びDKの拡充 ⑦長男家族の同居のための三世代住居への増改築と、家族の成長・衰退に合わせ、又時々の流れに揺られ、都合七回の増改築を繰り返すことになる。

7回の変容を概観すると、この住居は、台所のDK化、茶の間の洋風化、和室指向でありながら続き間としない独立和室を採用し続けたこと等、戦後の新しい住居の型を追った事例と言えよう。一方、儀式のために、住居の向きを路地側に向け続けたこと等、伝統的な側面を持続し続けた事例とも言えよう。以下、7つの変化の内、主要な時期の生活を図で列挙したい。

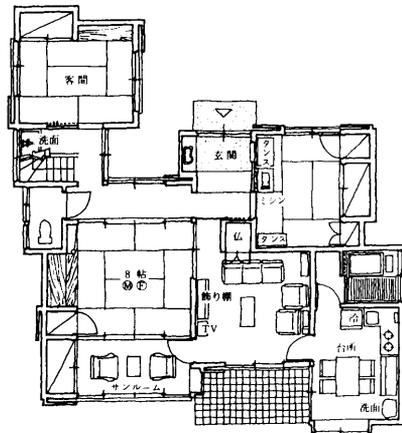
7回の変容を概観すると、この住居は、台所のDK化、茶の間の洋風化、和室指向でありながら続き間としない独立和室を採用し続けたこと等、戦後の新しい住居の型を追った事例と言えよう。一方、儀式のために、住居の向きを路地側に向け続けたこと等、伝統的な側面を持続し続けた事例とも言えよう。以下、7つの変化の内、主要な時期の生活を図で列挙したい。



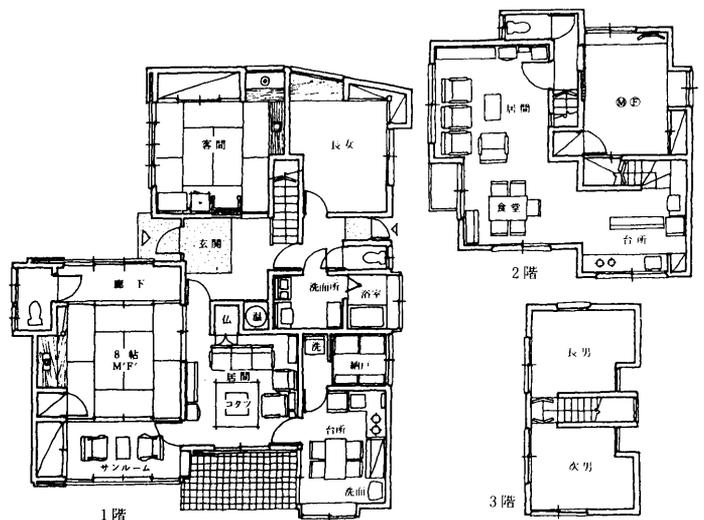
■入居当時の間取り (昭和18年頃)  
(家族構成； M'66、 F'62、 M'36、 F'28、 f4、 f2、 ml)



■北の間・玄関の充実・DK化とその失敗 (昭和29年)  
(家族構成； M'47、 F'39、 F'15、 F'13、 m12、 m6)



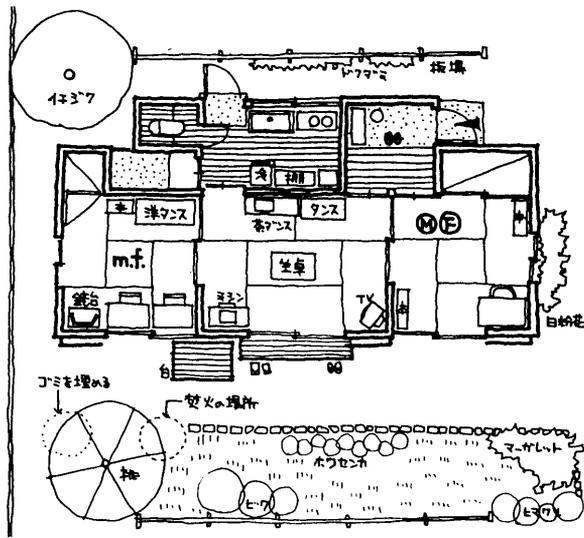
■茶の間の洋風化・DKの充実と定着 (昭和51年)  
(家族構成； M'69 F'61)



■三世代住居・唯一不変の廊下 (昭和55年)  
(家族構成； M'72、 F'64、 M'38、 F'37、 長男、次男、長女)

### 4.3 戦後の小住宅 (小平 遊)

- ・昭和25年頃建設・木造平屋の社宅
- ・東京都千代田区麹町・延床面積：38m<sup>2</sup>(11.5坪)



#### 〈住まいと家族の概略〉

この家に住んだのは、4歳(昭和27年)から10歳までの7年間。約1500m<sup>2</sup>の敷地に社宅10棟が南北に2列に並ぶ。各戸に庭があり、中央には通路を兼ねた共用のオープンスペースがあった。外壁は杉の下見板張り、切妻の屋根はセメント瓦。6畳の両側に4畳半が二つ、他に玄関と台所と納戸という単純な間取りである。

家族は、会社員で30代の父、専業主婦の母、私、3歳下の妹の4人。父は都電で20分程の丸ノ内に勤務、私と妹は隣の区立小学校に通っていた。

#### 〈開放的な家の造りとそこでの生活〉

玄関に近い4畳半は両親の寝室で、南を枕に二つ布団を敷いた。ここは父の書斎でもあり、帰宅後や休日、机に向かって書きものをしている父の姿を思い出す。西側の4畳半が子供部屋で、私と妹は東を枕に布団を並べて寝た。置いてある子供用の家具は、勉強机と椅子と小さな本箱だけ。他に鏡台と両親の洋服ダンスがあった。

中央の6畳は茶の間。食事や団らんの場で、親戚や父の友人もここでもてなした。折り畳み脚の卓袱台があり、逆さまにして乗り物に見立ててよく遊んだ。また唯一機械らしい足踏み式のミシンには興味を引かれ、針を折っては叱られた。茶箆の上の真空管ラジオで聴いた〔笛吹童子〕の音楽が浮かぶ度に、当時の茶の間の雰囲気をおぼえて思い出す。テレビを購入したのは小学2年の頃で、近所の子供達と喰い入るように番組を見た。

襖を閉めるのは、寝る時と特別な場合だけで、普段3室はひとつながりの空間として使っていた。

台所は板の間で、人研の流し、鋳物のガスコンロ、氷式の冷蔵庫、食品棚があった。便所は所謂汽車式で、紐を引いて水を流す。便所の隣に、風呂桶の置ける(水の

流せる)三和土があったが、納戸にしていた。当時ここに風呂を置く家はなく、みんな風呂屋に通っていた。

小さな家のわりに玄関は広がった。玄関の板の間を抜けて、ピアノやソファを置く家もあった。玄関は来客や出勤と登校、家族揃っての外出に使うぐらいで、日常的には南側の濡縁から出入りしていた。近所の主婦は濡縁か勝手口から現われる。母親が留守のとき、我々子供達は妻側の小さな掃き出し窓から家に入った。

桃の木には実が生り、春先の間引き、初夏の袋かけは子供の仕事だった。裏のイチジクの枝の上に、隣の原っぱで拾ってきた古畳や廃材で小屋を作って遊んだ。庭では行水や焚火や花火もした。子供達の花火を、浴衣の母が濡縁にいて、父がトリスを飲みながら茶の間から見ている。茶の間と庭とは濡縁を介して一体の空間だった。

小さい頃は社宅の敷地全体が遊び場だった。家と家の間には簡単な板塀があるだけで、どこへでも自由に出入りできた。隣の庭には雑草が覆い繁り、バッタやカマキリを追いかけた。戦後のベビーブームで、社宅には同じような歳の子供が多い。南北50m程の中央の空き地で、自転車の練習や、ボール投げ、罐蹴り等をして遊んだ。或る時、立体放送の実験放送があった。父親達がラジオを持ち出し、左右に並べて、社宅の人みんなで聞いた。中央の空き地はそんな共用空間でもあった。

今からみれば小さくて貧弱な家である。しかしそんな風に思ったことはなかった。長い廊下のある「お屋敷」もあるが、店の奥や工場の2階に住んでいる友達も大勢いる。隣の原っぱには、浮浪者が古畳を立て掛けて住んでいる。そんな時代だった。

#### 〈近代化の萌芽と伝統の残照〉

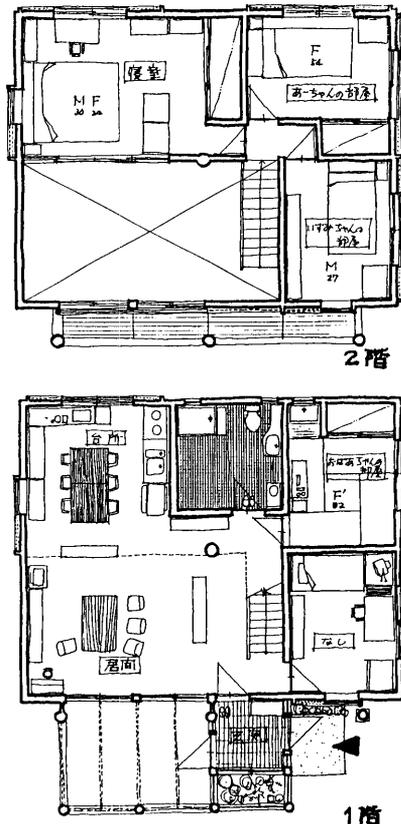
この家は、居間中心型というより茶の間中心型の間取りで、食寝分離や寝室の分解といった近代的な住み方を想定して計画したようにも見える。我々家族はそのように生活したが、違う住み方もあった。住まいは必ずしも近代的ではないが、住み手の意識が近代を志向していた。廊下をとらず合理的でコンパクトな平面こそが近代的とされた。また居室をすべて南面させた構成は、日常性を重視した近代的な住宅理念に適っていた。

一方、全室畳、壁の少ない開放的な続き間の構成、広い玄関などに、伝統的な形が残されている。畳の上でのユカ座の生活は多くの起居室を必要とせず、狭くてもなんとか生活できた。続き間は狭い家を広く感じさせたし、いろいろな家族構成や生活に柔軟に対応できた。

この家は、貧しい戦後という時代のなかで、日本の伝統的な住まいが、近代的な住まいへと推移していく過渡期の姿を示している。しかし変化はまだ緩やかだった。この後の高度経済成長期における、電化製品や耐久消費財の住まいへの大量導入、商品消費社会への移行、無国籍化が、生活を変え、住まいを急激に変えていく。

#### 4.4 モダンリビングへの戸惑い (近沢進一)

- ・昭和41年千葉県船橋市に建築
- ・木造2階建独立住宅、持家
- ・敷地面積：約320m<sup>2</sup>、延べ床面積：170m<sup>2</sup> (51坪)



この家は、いわゆる〈モダンリビング〉を地で行くような家で、義父が設計したものです。義父は明治41年生まれの建築家ですから、この家を設計したのは59歳の時ということになります。こういうプランは、私が大学に在学していた昭和30年代中頃、池辺陽先生がお書きになった「すまい」(岩波婦人叢書、1954年初版)という本などをテキストにして、これからの日本の住宅の方向として、みねぎしやすお先生などから教わった住宅そのもののような気がしますし、当時の雑誌を通して知った増沢尙さんの住宅などもこの傾向のプランだったように思います。

しかし、この家はそれまでに私が体験してきた生活と住居とはかなり異質なものだということも、漠然とですが感じました。

玄関で客を迎える時も、最初はかなり戸惑いました。式台があるとか無いとかではなく、突立ったまま客を迎え、内扉のところを塞ぐような感じで玄関先で話をすることに、なんとなく違和感がありました。玄関とはもうすこし家の中の雰囲気に触れられる場所だと思っていたものですから。

吹き抜けの居間には広い壁面がありますが、そこには大きな油絵や蠟燭染の作品などが沢山懸けられていま

た。これも、わたしが今まで親しんできた部屋のしつらい方とは大分違っています。なんとなく、住宅にしては大袈裟すぎるように思ったのです。

しかし、このような玄関や居間のづくりも、北陸の田舎町で育った私だから戸惑っただけで、進取の気質を持ってそれなりのスタイルを身につけていた人にとっては、別にどうということでも無いのかも知れません。

義母は紅茶を入れるのがとても上手です。また、いろいろな種類のケーキを、手早く上手に作るのにも驚かされました。これらは、私の好きなキンピラゴボウやヒジキの世界とは違うのですが、なんとなくこの家の構えに良く合っていました。

海軍出身の義父が自邸の設計でイメージしていたのは、きっとスマートな洋風の住様式だったのでしょう。

昭和46年当時の居住家族構成は、義祖母(82歳)、義母(54歳)、私(30歳)、妻(24歳)、義兄(27歳)の5人で、各人は個室を持っていました。義祖母の部屋だけが小さな水屋が付いた和室で、それ以外の個室は全て洋室です。浴室・便所が不自然に広いのは、染色を趣味とする義母の作業場を兼ねたためだったようです。

個室に居るかぎりは、視線や音などについてのプライバシーはかなり保持できるし、いったん個室を出れば1階のLDKに行く他ないわけです。個室の扉から出た瞬間から、その人は居間の空間に参加していることとなります。その意味では、この家の空間構成は非常に単純明快であり合理的であると言えるし、見方を変えれば全く壁とか陰影のない、偏平な空間構成だと言うこともできましよう。

しかし、南面して大きく吹き抜けた居間は、それなりに気持ちの良い空間でしたし、接客は、全てその居間で行われます。家族は個室に潜んでいない限り、必ず客と顔を合わすこととなります。客に食事を出すときは、当然家族と一緒に食べてもらうこととなります。いやでも、なんらかの会話をしなければなりません。かくして、わたしは義母の友人・知人・祖母の友人・知人、義兄の友人・知人、みーんなよく知ることとなります。

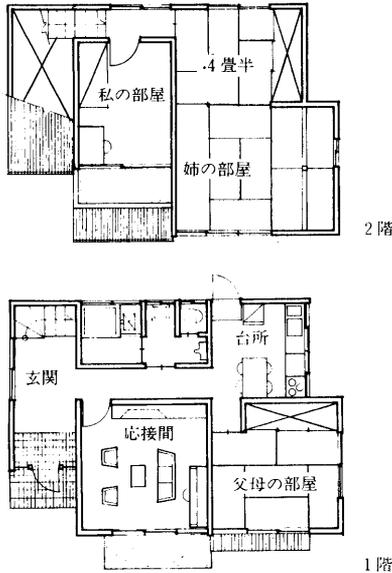
ただ、家族が居間でくつろぐ時は、あまり椅子に腰掛けないで、床に座ってしまうのです。最初は椅子にかけられるのですが、その内いつのまにかズルズルと床にじかに座っているのです。

残業を終えて、まちまちに時間に帰宅する者どもは、各自適当につまみを作ったり、冷蔵庫からひっぱり出したりして、チビリチビリとやります。確かに、このようなLDKスタイルは、調理への男の気軽な参加を促したようにも思います。

家族各人の生活時間が一様でなくなってきていたことと、このような言わば公私室型のモダンリビングの形式はうまく合致していたと、見ることもできます。

#### 4.5 変動期の郊外建売住宅（酒井一郎）

- ・昭和37年・工務店の建売り住宅
- ・東京都杉並区高井戸・木造2階建持家
- ・敷地面積約60坪・延べ面積28坪



##### ① 常識的に言うとおかしな平面・おかしな生活

今杉並の家を振り返って見て考えることは、現在における生活スタイル・食寝分離公私分離などの住居学的概念から見ると、おかしな生活を強いられていたということであり、しかもその生活が本人にとっては決しておかしくないあたりまえのことだと感じていたことである。というのは、杉並の家は昭和37年頃の、設計がいかにあるべきかといった明確な指針のない時代の郊外建売住宅であったからだ。1階に独立した洋風応接間、2階に続き間座敷があり、戦前からの固定概念とダイニングキッチンが混ざりあっている。

##### ② 中学生にとっては私室さえあれば良かった？

部屋の利用については私室から決まった。1階の和室が父母の部屋、2階の洋室が私、2階の続き間和室が姉。本当は姉の希望では6畳の洋室が良かったらしい。この家で覚えていることは、私はほとんど私室で過ごしたということであり、中学生の私には私室さえあれば、他はたいした問題ではなかったのかもしれない。

##### ③ 主寝室＝和室での食事と父親の権威！

食事は、朝食などはダイニングキッチンで、夕食は和室ですることが多く団らんもそこであった。この規模の家で、食寝分離も公私分離もできないおかしな平面ということになる。この和室＝主寝室で、父は随分長い晩酌をした。私達が食事と呼ばれる頃には父は晩酌をはじめており、私達が食事を終わってもしばらくまだ飲んでた。今主人の晩酌の在り方を考えると、

テレビのホームドラマの、父親だけがソファーで晩酌をし他の家族はダイニングで食事をしている光景が思い浮かぶ。しかし気の弱い私にはそんなことをすれば家族から疎外される気がし、ダイニングで一緒に急いでビールを飲み干し一緒に食事を終わるといった生活になる。本当は和室かソファーで家族と一緒にゆったりと晩酌がしたいのだが、ダイニングテーブルで長時間晩酌をするというのも疲れるし、あわただしく晩酌するのも本当はイヤだ。

食事の場とくつろぎの場を分けるという欧米の考え方は、母親の小さい子のしつけや行儀に対する意見が優位になってはじめて固定したのであろう。また、主寝室で食事するのは確かに子供の立場ではやりにくいが、何となく父親の食事による権威づけみたいなのがあった。

##### ④ 憧れ空間としての応接間

そんなわけで我が家では、台所や主寝室から独立している1階の洋室をほとんど利用しなかった。今思うとそれでも父の客が時々来ていたし、たまの日曜日には家族そろってこの部屋で過ごした。明るくて、暖炉まがいの飾りがあって、芝生の庭へとつながる。とてもリッチで郊外住宅へ引っ越した良さを感じさせた。今私の家には、たまにしか使わない立派な部屋というものはない。すべての部屋をまんべんなく使い、立派だとか憧れるとかいった空間はなくなってしまった。

##### ⑤ 続き間和室で主人は主人らしく客は客らしく！

2階の続き間座敷では、毎年1回正月の接待が行われた。この日は朝から母も私も姉も覚悟しており、母は料理とその運搬、私と姉は若干の手伝い。途中から遊びに出された。しかも、夕方帰ってきてこれも続いており、息をひそめるように食事し寝てしまったものである。今私の家では、ダイニングリビングで接待するが、これは主人である私にちっとも晴れがましさを与えてくれない。というのは、2階座敷であれば、主人が食べ物を運んだら客は客だけで取り残される。めったなことでは主人は動かない。キッチン脇では、どうしても主人はホストになり下がり、客は客然としていられない。2階続き間での接客は、もちろん家族の多大な犠牲の上になりつつののだが、主人にとっては良いものであったようだ。

##### ⑥ 当時の我が家にとっては良い住宅

そんなふうに考えると、皆にはひどい平面だひどい生活をしていたと言われるが、子供がある程度大きくなった家族には素晴らしい家であったように思われてくる。住宅はただ単に寝て食べてくつろげば良いというものではない。日本人には日本人のくつろぎ方、接待の仕方というものがあつたわけで、少なくとも当時の我が家にとっては良い住宅であつたと居直りたい。

#### 4.6 郊外のマイホーム(佐藤和子)

・埼玉県浦和市・1982年3月建設・大手住宅メーカーの  
建売り分譲住宅・木造2階建・敷地200m<sup>2</sup> 延床120m<sup>2</sup>・家  
族構成：夫婦(40代)+息子+娘

〈購入の経緯〉

子供達が各々個室を必要とする年齢になり、前の住まいはそろそろ住み難くなっていた。そんなある土曜日、分譲住宅の折込チラシを見て出かける気になったのは、二人ともたまたま暇だったからである。

良く晴れた日で、車を降りたら並木と植え込みが全く良い印象だった。250戸程の小さな戸建て団地だが、この辺には珍らしいきちんとした宅造で、路上にゴミひとつなかった。販売所に寄ると、売り出し住戸はいずれも街区北側の売れ残りだと言う。だが主人は建物を見る前から、町並みをすっかり気に入った様子だった。

さて、案内された当の建物はと言えば、(いや、そこに並んだ全ての建物が)全く住宅展示場そのものの派手さで、「松風」「クリスタル・シャロンヌ」等、各戸に名前まで付けて外観の違いを強調していた。しかし、価格、広さ、立地、プランは、どれをとっても五十歩百歩あきれる程似通っていた。プランで言えば吹抜けのある玄関ホールとそれに続く階段、玄関脇の和室には必ず床の間が付く。勝手口のある台所と12畳ほどのLD、2階は6畳主体の個室群といったところである。

中では、個室にバラエティのある「ワイン・マンサード」を選び試算してもらった。「最後だから内緒で値引きします」の言葉で勝負あった、という所かもしれない。

夜、あの家は恥ずかしいと言う私。主人は「家は建て替えるが、環境は自分では変えられない」という意見。これには納得せざるを得なかった。結局次の日契約し、数カ月後に転居した。

〈住まい方〉

部屋割はあっさり決まった。1階8畳が主寝室、2階で一番広い部屋が息子6帖が娘。これ以外ないと言う程当たり前の決め方だと思っていたのだが、設計者の設定では下の8畳が客間、2階の大きい部屋が主寝室らしい。確かに下の8畳間はプライバシーが無く、一般に言う「寝室」とは違うが、核家族でプライバシーなど必要としなかったし、それより1階に誰も住まないという方が変な気がした。床の間は洋服タンスに改造した。

居間に手持ちの食卓を置き、あとはTVと小さな卓袱台だけで、2~3年家具なしで暮した。家具は生活を固定化するというが、幾らか思い当たる。家具なしの頃は、テレビの前やこたつで食事をする事も多かったが、家具の増えた今では、来客の食事も食卓でして、こたつでの食事は正月だけになった。

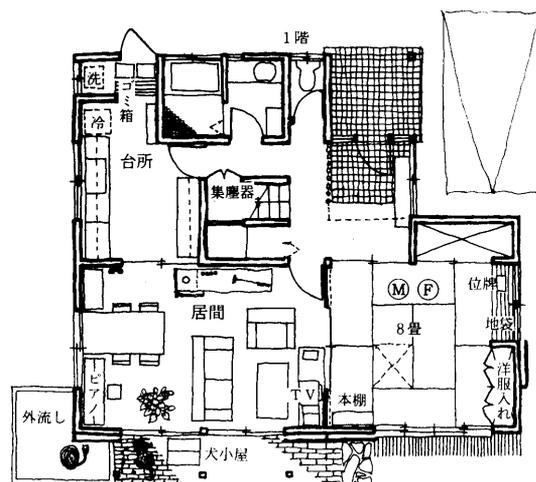
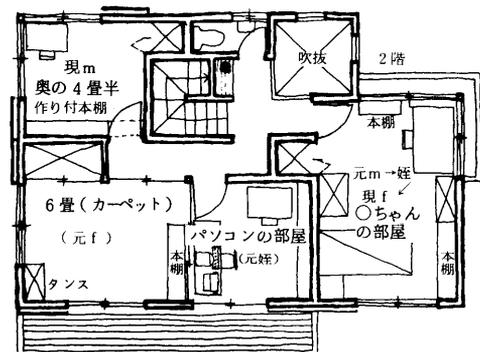
私が外から帰ると、子供達はいつも居間にいる。TVを見るのはもちろん、読書も音楽を聞くのも、勉強だって

受験直前以外居間でしている。パソコンも居間に置きたいと言う。主人のゴルフ練習・仕事から私の読書化粧に至るまで、家族の生活時間のほとんどは居間に集中して、いまのいまはまいましい程狭くなった。

昔に比べ、泊り客は減少した。2階の6畳を泊まり客用の寝室にしているが、両親の場合は下の8畳に寝て貰う。この格付けは親にとって重要だと分かっているのに、最近母一人の場合、2階に寝て貰ったりする。反省。引越し挨拶<sup>かたがた</sup> 旁、同じ街区の人に声をかけ、庭に備え付けのバーベキュー炉を使ってパーティーをした。これがきっかけで近所付き合いが始まり、年に数回、持ち回りで大宴会を開いている。わが家での宴会時には、居間と和室をつなげ、集めた座卓を一行に並べて座る。床柱の前がカラオケの舞台になる。

〈住んでの感想〉

この家は外構、プランから設備に至るまで、購入層の平均的な好みを的確に捉えていて、おまけに空調機用の地袋にも小棚を付けるといった類の小技も結構多い。どこと言って際だった欠点を現わさない大手住宅メーカーの実力には感心した。今では、ぬるま湯のようなこの家のつくりにも大分慣れ、通俗な外観やディテールにいらいらすることも少なくなった。「これが自分の家」と照れずには言えない恥ずかしさは、私の受けた建築教育の名残りで、子供達にとって、これが懐かしい自分の家になることは間違いない。



#### 4.7 典型的な3寝室型平面のマンション（江副満生）

- ・昭和56年建築・大手ゼネコンの設計施工
- ・東京都品川区・分譲マンション
- ・延床面積 23.3坪

この住宅には昭和56年から昭和62年までまる6年居住しました。都心型マンションのため入居層は多様でしたが、年齢、収入ともに概ね平均的でした。この北品川5丁目、通称小関地区は品川神社の氏子であり、昔から住んでいるお年寄りも多く、マンションの外へ一歩出ると何となく下町の風情がありました。初めての祭りのときなど、町内会の所有するハッピーを子供たちが着せてもらい親子ともども大変感激した記憶があります。

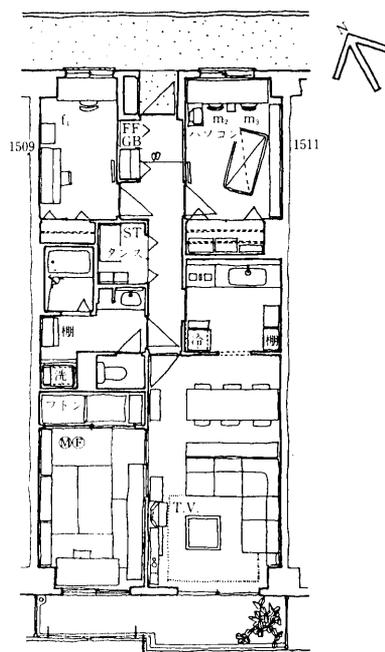
このような近隣に対する新鮮な感触と、ちょうど子育てに多忙な時期であったことなどが重なって、われわれは自然に地域社会活動の一端を担うようになっていました。子供が次々と小学校に入学し3人目が御世話になる頃には、妻も心の準備ができ、推されてPTA執行部役員になり、私も翌年からマンション管理組合（286戸）の副理事長を務めました。

住居は15階建ての最上階、向きは西に少し振れていましたが、そのため子供が学校から帰るころには日射しが室内に深く延びていて、間口のハンディを感じませんでした。間取りは南側に公室と和室を、北側に狭いながらも2室を確保したもので、その中間の水廻りがどの室からも近いというのもとても便利でした。ただ、このあまりの便利さに6年間も慣らされた功罪は大きいとつくづく考えています。

設計はとても親切で、所謂かゆいところに手が届くとも言えるのでしょうか、特に水廻りの使い勝手は抜群でした。なかでも、洗面・脱衣室における洗濯機置き場の位置、台所の動線と広さはとても気に入っていました。また、狭いながらも納戸が設けられている点、90センチ奥行き押し入れに前後2本のパイプを通して2列の洋服箆筒としていた点なども気に入っていました。

6年間の住み方は基本的に変わっていません。ここへ住み替えたときに資金的に若干の余裕ができたので、これまで使っていた家具の半分を棄て、新しいシステム家具に変えました。初めてソファなるものも購入しました。これは日常はソファとして使い、来客時には2台のベッドになるように想定したものです。

今から思うと、入居時点でこの間取りのコンセプトをそれなりに受け入れていたのだと思います。そうでなかったら、喜んでシステム家具など配置しなかったと思います。いわば、設計者の呪文にまんまと引っ掛かって、設計者の思惑どおりに住み始めた訳です。設計者の思惑とは、相手の生活構わず型に填込もうとするもので、われわれも住み方を変えることなく6年間を過ごすことになったのです。



図—— 6年間ほとんど変わることのなかった住み方

このような夫婦は南に子は北にという想定は、幼稚園児や小学生をもつ家庭の生活にはなかなか馴染まないものでした。たまにおねしょをする子供たちを設計者の図式どおりに配置して生活する不便は折に触れ感じていました。何かある度に子供たちは大挙して押し寄せ布団のなかに潜り込んできました。

また、日中は子供達が友人を大勢連れて台風のようにやってくる事が多く、そのような場合は例外なく広くて明るい居間を占拠しましたが、そうした使い方など全く予想外のものでした。大切なシステム家具の上に乗ってソファの上に飛び降りる遊びは格別だったようです。親がいない時など、何をしていたのか分かりません。子供3人はよく野球やバレーボールの真似ごとをやっていました。場所は居間と廊下の2ヶ所です。

わが家に泊まりにくる客といえば、妻の両親、私の母が主で、他に私の友人がたまに来るくらいでした。親は孫と一緒に過ごすことが目的ですし、見栄を張っても仕方がないので、その都度対応していましたが、私の友人となるとそうもいかなかったようです。2人とも来客を住居に受け入れることは自然におこなっていましたが、泊めるとなるとこのスペースではややこしくなります。入居時の何回かは、来客を和室に通してわれわれが居間のソファへ移動していましたが、こんな所に来てまで来客はプライバシーを期待していない、被害者はわれわれだと分かり、そのうちに来客をソファに泊めるようになりました。さらに長女が高学年になると、長女を隣に移動させ、来客を長女の室に泊めるようにしました。

かくして、間取りの特徴を認めながらも、これに生活上の不便を感じる事が少なくありませんでした。

## 5. 都市の住居にみる型の崩壊と生成

ここでは、戦前の大都市部の中流層を中心に普及したいわゆる「中廊下型住宅」を近年の変容以前の都市住宅の「型」とする。そして、近年首都圏の都市及びその近郊に建設される住宅の大半を占める「現代型住宅」(4.6のように1階にLDKと和室があり2階に複数の寝室が用意された住宅)を現代の都市住宅の典型例として対置し、その間の幾つかの事例を参照しつつ、住まいにおける「型」の崩壊あるいは変容を整理したい。

### (1) 洋風居間の形成

「中廊下型」と「現代型」には多くの相違点がある。第一に指摘できるのは、和室中心の構成から洋室中心の構成への変化である。地方では現在でも和室は固有の意味をもって生き続けているが、首都圏では和洋の比率は完全に逆転したといえる。これは社会全般における洋風化の波が、保守性の強い住宅へもいつの間にか浸透した結果と言えらる。また特に戦後強まった機能性追求の思潮が、椅子式生活の採用を促したためでもある。さらに体験記述の随所に見られるような欧米式の生活に対する人々の素朴な憧れも洋室化への強い動機となった。

人々は機能性だけを評価したのではない。それまで体験したことのない、テーブルでの食事、気持ち良さそうなソファ、モダンな家具類や電気製品、それらとセットになった洋室の雰囲気憧れたのである。勉強机・テーブル・ソファ・飾り棚・ピアノといった洋式家具の導入が先行し、部屋の洋室化はそれに追随する形で進行した。椅子式家具の普及は、場の用途を特定し、食事の場と団らん場の分化に見られるように、生活の機能分化を促進させた。これは居間の確立の引金となった。日本での居間の形成は、私室の形成とも表裏の関係にあるとはいえ、洋式家具のしつらえのための場という性格も見逃してはならない。しかもこのしつらえは、既成の応接用家具を安易に置き並べるのみで、居住者の主体的な働きかけにより家族の集まりやくつろぎにふさわしい場の形成の見られる例は極めて乏しい。

欧米への憧れが相対的に弱まり、機能性重視からゆとりの重視へと変化している現在、欧米を手本とする洋室化への志向は弱まりつつある。また洋室でのユカ座の生活併用の実態は多くの研究者の指摘するところである。住宅内での脱下足の住様式は当分変わらないとすれば、清潔な床面を活用した生活様式が新たな日本の居間の「型」の生成を促す可能性は大きいと言える。

### (2) 個室化の進行

「中廊下型」から「現代型」への大きな変容の一つは、専用子供室の形成である。「中廊下型」では、子供の寝る部屋は親や老人と一緒にだったり、ある程度成長した子供達でも何人かが同室で就寝する例が多かった。また子供

の勉強部屋も、茶の間が充てられたり、複数の子供で共用する場合が多かった。

専用子供室形成の背景には、個人を尊重する戦後民主主義の理念がある。ここで注意すべきは、夫婦寝室の確立に先行して子供部屋が確保された点で、ここに日本的な特質がある。これは、学歴偏重社会における受験への関心の高まりの中で、子供の勉強重視が大きな要因であろうし、家族人数減少傾向の中における子供の社会性喪失の動きに安易に迎合したためでもあろう。

子供室の優先は、見方を変えれば夫婦寝室の独立要求が相対的には弱かったことを表わしている。一般に、家の中心に親が位置し家全体を統合するという性格が強くと、夫婦生活の独立性確保という面はさして重視されていない。最近では、平面計画上は夫婦寝室を独立させ、2階の個室群の中あるいは1階の一部に確保される例が多いが、実態は夫婦の日常生活はむしろ居間・DKなどに拠点が置かれるのが一般的である。寝室は結局寝室機能のみで、必ずしも夫婦私室といった性格を帯びていない。「公私分化」は実は計画面のみの理念で、実態は子供室のみの析出に終わっている。

誰からも干渉されずにすむ個室は、子供にとっては居心地のよい空間であり、そこに閉じ籠もりがちになるのは無理からぬところである。しかし、家の中において果たして子供は完全に自立した個と認めうる存在なのか。子供の教育に対する親の責任はどう考えるべきなのか。こうした問題が提起され始めている現在、これからの子供部屋の在り方は、住居のなかでの大人の場の在り方も含めて問い直されなくてはならない。

### (3) 専用接客空間の喪失

「中廊下型住宅」には、接客を主目的とした続き間座敷と、家族生活のための茶の間があるのが普通だった。4.1のように1階の続き間を家族空間として使うことを意図した事例でも、2階には格式の高い座敷を別に確保していた。また「中廊下型住宅」では続き間座敷のほかに玄関脇に洋風の「応接間」を持つ例が多かった(4.4には部分的にその形跡が残る)。しかし戦後の計画的な住宅からは専用接客空間は姿を消した。

接客空間が喪失した背景には、戦後の貧しい住宅事情があった。狭小な住宅においては接客空間を確保する余裕がなかった。また封建的な戦前の日本の体質に反省の眼が向けられ、格式性につながる接客空間を積極的に排斥しようとする思潮が、戦後民主主義の波のなかで主流を占めた。さらに、頻度の少ない接客のために住宅のなかに過大な空間を用意するのは無駄だとする考え方も、接客空間の排斥に力を貸した。こうした論理は、住宅規模の拡大した現在でもなお残り、接客は居間で行われる場合が多い。

居間は家族が集い憩うための空間であるはずである。

そこに家族の日常生活とは性格の異なる接客行為が持ち込まれた結果、居間は矛盾した性格を内包することになり、家族にとって必ずしも居心地のよい空間ではなくなってしまう。「現代型住宅」の居間は、生活様式、起居様式からみて、現在なお揺らいでいる。

人間が社会のなかで暮らす以上、人との接触の場を住宅内に持つことは自然なことである。たとえ頻度が少なくとも、接客行為のもつ非日常的で晴れやかな雰囲気は家族に与える影響は大きい。最近の住宅にみられるLDKに隣接した独立座敷の存在は、和室への郷愁とともに、接客空間に対する人々の思いを反映したものでなからうか。住まいのなかで接客をどう位置づけるかは、これからの「型」の生成に関わる大きな課題といえる。

#### (4) 廊下という様式の持続

「中廊下型住宅」は、その呼称が示すごとく、住宅内を横断する廊下に大きな特徴があった。そして中廊下には、室内の通り抜けを避けて異種領域の各々独立した存在を保証するという意味があると解釈されている。

「中廊下型」が普及し始めた大正期には、家族生活を家の中心に据えるべしとする理念をそのまま図式化したような「居間中心型」なる平面が提案された。当時は必ずしも普及はしなかったが、戦後の公共集合住宅や建築家達の提案の中には、廊下を排し、居間あるいはDKを中心に必要諸室を配置する形式が多く見られる。そこには家族中心という理念のほか、住宅内から無駄な面積を極力減らし居室面積を最大限確保しようとする合理化への思考も働いていた。廊下という手法を用いずホール的な居室を介して各室を分離・連絡する構成は、世界各地の住宅にも広く見られる。

こうした提案や実例の存在にも関わらず、最近の戸建住宅に根強く中廊下が存在しているのは何故か。和室とLDKという異質の空間の混在併存を保証するしかけとも考えられるが、しかもなお、これら和洋室が開放的に連続している点が奇妙である。敢えて解釈するならば異質空間を連続させつつもなお分離した使用を可能とし、かつ、場を変えろという気分を演出する装置として中廊下が機能していると考えられるが、あるいは日本人のもつ固有の空間概念に帰せられるものかもしれない。この疑問に対する解釈は、今後の「型」の生成を読むための一つの鍵になるものと思われる。

#### (5) 住まいと「型」

一方、様々な体験記述から「型」の意味についてもいくつかの手掛りを得た。第一に、我々の心の中の住まいは、天井の高さ、降りそそぐ光、奥まった静寂等、空間全体の雰囲気によくを依存していることである。このよえな「雰囲気型の型」も、戦後大きく変わった点の一つであり、今後検討すべき課題と言えろ。

もう一つは、住まいの変化の端緒は、「部分の型」にあ

る場合が多いことである。例えば子供室やDKが欲しいという契機である。しかも現代では、こうした部分の型に対してマスメディアが絶え間なく働きかけ、それが変化の主因の一つになっている。一方、全体の型は供給側・設計側の頭の中で組立てられる側面が強い。公私室型住宅も多くの居住者には子供室の確保という意味に過ぎないかも知れない。部分の型と全体の型の関係の追求が現代における型の崩壊と生成を考察する鍵となろう。

#### (6) 「計画」の役割と「文化」の力

住居の変容を生む要因は、言うまでもなく社会的状況の変化である。外界の状況の変化が否応なく住居の変容を強い、またそれに応じて人々の要求の変化が住居を内側から変えて行く。

そのなかであって、住居現代史を「計画」と「文化」の相剋の歴史とみることもできる。「計画」は、望ましいと信じた理念を基に、先進事例を参考にしながら、生活実態の科学的分析を根拠として、意識的に新しい型を生み出そうと努力を重ねて来た。一方、長い生活の伝統に育まれながら人々の内部に浸透した「文化」が、異なる文化を背景とする先進事例の参照に歯止めをかけ、科学的分析ではすくいきれない生活の意味を「計画」に問いかけてきたのである。

「文化」からの問いかけの最大の問題点を、和室・続き間の存続と中廊下の持続の意味の解釈ととらえ、一方、現代の状況における問題点を、個室分化と洋風居間のあり方にあると見たい。より望ましい「型」の生成を導くためには、「計画」はさらに実態を見つめつつ文化への考察を深め、積極的に提案を試みる必要があるであろう。

#### 〈研究組織〉

主査	鈴木 成文	東京大学	名誉教授
委員	小柳津醇一	芝浦工業大学	助教授
	畑 聡一	芝浦工業大学	助教授
	初見 学	東京理科大学	講師
	在塚 礼子	埼玉大学	助教授
	友田 博通	昭和女子大学	助教授
	長沢 悟	日本大学	講師
	曾根 陽子	共栄学園短期大学	講師
	笠嶋 泰	大同工業大学	講師
	戸部 栄一	八戸工業大学	助教授
	小林 秀樹	建設省建築研究所	
	菊地 成朋	東京大学	助手
	黒野 弘靖	東京大学	大学院
協力	峯 成子	東京家政学院大学	教授
	高岡えり子	山設計工房	
	三井 健次	東京大学	大学院
	長田 裕子	東京大学	大学院
	金子 友美	昭和女子大学	助手